

# 山形大学附属博物館報 17

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1991. 3. 1

## 目 次

三浦文庫と山大附属博物館 .....	(1)
博物館と公文書館 .....	(2)
資料紹介 .....	(3)
平成2年度公開講座・特別展を終えて .....	(4)

## 三浦文庫と山大附属博物館

館長 横山 昭 男

当博物館は、いわゆる総合的な博物館として、各種の資料を収蔵・展示しているが、その中でも主要な歴史資料の一つに三浦文庫がある。三浦文庫の資料については、すでに「古文書近世史料目録」として3冊だしているが、今回同文庫の最終目録（本館、近世史料目録、第13号）を刊行するに当り、同文庫が当館に収蔵されるに至った経緯やその意義について、紹介することとしたい。

三浦文庫とは、山形の豪商家の出で、西洋史家として名高い三浦新七博士の指導と資金で収集された近世の庶民史料を中心としたものである。これが収集されたのは、昭和初期から第二次大戦期までの間であるが、その頃日本では、昭和恐慌の嵐で農村は疲弊し、軍国主義が台頭する中で、郷土研究、農村社会の研究が盛んであった。ヨーロッパ留学のち、母校の東京商科大学教授となっていた三浦新七氏は、昭和2年、両羽銀行（山形銀行の前身）の経営再建のため山形に帰り、同10年商科大学学長に迎えられるまで、両羽銀行頭取となり、かたわら、山形高等学校の講師（法制経済）を勤めていた。また山形県郷土研究会を主宰し、その会長となり、これは昭和17年頃まで続いている。

当時、郷土研究の団体は全国各地にみられたが、山形の郷土研究会は中でも優れたもので、それは

会長の識見によるものであったことはいうまでもない。この郷土研究会は、山形高等学校、山形師範学校の教授をはじめ民間の研究者からなる、自主的・学問的な研究団体で、歴史・地理・民俗・自然など、各分野にわたり、今日でいうまさに学際的な調査研究をねらいとしていたのである。この会は、全国学界も戦時色を深め、自由が失われる中で、すぐれた研究報告書や資料集をだしたばかりでなく、とくに注目されることは、将来、歴史学・地理学研究のためには、いま根本史料の収集・保存が重要であること、史料入手が不可能な場合は、写本を作成することも事業の一つとしていたことである。地方の研究団体で、しかも庶民史料を対象として考えていたことはすばらしいことであった。長年ドイツに留学して学んだ三浦氏は、この史料の収集と保存は、これからの歴史研究の基礎であると考えていたのである。直接史料の収集には、当時山形師範学校の長井政太郎教諭（のち山形大学教授）らが当たったが、その資金は、三浦氏個人が提供していたのである。

その後、日中戦争、第二次世界大戦下に入り、学問的な研究もすべて制約されたが、昭和20年に終戦を迎え、ようやく自由な学問研究が保障された。一方農地改革や財閥解体によって、長い間、個人的に所蔵された膨大な資料が開放された。明治以後80年を経過した日本が、明治以前の江戸期について、また明治以後の、とくに社会・経済および庶民生活に関する研究が立ち遅れていたのは、これらの資料がほとんど利用できなかったからであった。ところで、一掃に開放されたこれらの大

量の資料を、戦後の混乱期の中で収集し、保存できるところは多くはなかった。全国の大学の中でも、関係の教官研究者が共同し、資料収集を図ったところは、一部の私立大学を除けば数大学に過ぎない。

その一つが山形大学である。熊本大学・岡山大学は膨大な藩政史料をもつことで知られ、滋賀大学は近江商人史料の所蔵を特色としている。山形大学は、農村・地主・商人などの庶民資料が中心となっていることが特徴である。資料収集の方法は、寄贈・寄託（永久的）・購入などいろいろである。主なものに、稲村家文書、村形家文書、銚洗村文書、五十嵐氏・菅川氏旧蔵文書など約5万点による（くわしくは『歴史資料保存機関総覧』東日本、山川出版社）。これらの大量の資料が山形大学に収蔵されるようになったのは、当時の大学関係者の賢明な判断によるものであり、旧蔵者の理解によるものであった。これらの判断の基礎に、戦前から収集された三浦文庫の存在があり、その意義が継承されたものといえよう。同時にまた山形地方が、近世史料を中心に歴史資料が全国的にも豊富などころであるという背景があったことも事実である。

これらの根本史料は、保存とともに分類整理され、広く研究のために公開されるには、これらの史料目録の刊行が必要であり、博物館の重点事業の一つとして継続しなければならないであろう。

## 博物館と公文書館

岩 鼻 通 明

最近、地方自治体による博物館の建設が盛んで、ほとんどの都道府県に立派な都道府県立の博物館が存在する。博物館というと、アンティークなイメージが先行しがちであるが、これらの博物館はむしろ地域の情報センターとして機能しているところに特色がある。

年に何回か開催される特別展や企画展においてこの特色がフルに発揮される。それぞれの地域における歴史・地理・民俗・自然などに関する最新の情報と研究成果を網羅した展示内容は見ごたえあるものとなっている。

私も、各地に調査に出かけた折には、できる限り、これらの博物館を見学するように努めてい

る。ただ、いろいろと問題もあり、なかなか各地の博物館で開催されている特別展・企画展の情報が入手できないことがまずあげられる。

私見の限りでは、名著出版から発行されている月刊誌の「歴史手帖」に掲載されている「全国催しもの情報」が最も詳しいようで、月号案しみにしているが、それでも、情報が入らなったり、会期中にどうしても訪問できない場合も少なくない。

そのような場合に救いとなるのが、それぞれの博物館で作成される展示図録（目録）などと称されるカタログ類である。これには、主要展示がカラー図版で掲載されていることが多いため、もし展示を見学できなかった場合の参考になるし、研究資料として活用できる内容を有するものも少なからずみられる。

ただし、このカタログも博物館によっては、ほとんど発行されないケースもあり、また部数が限られているため、短期間に品切れになってしまうのが頭痛いところである。私も、しばらくたってから連絡したら、すでに品切れで、ほぞを喰んだということがつい最近もあった。ひどい場合は会期中にカタログが売り切れてしまったという例もある。これらのカタログは、一般書店では販売されず、その博物館でのみ販売される場合がほとんどのため、入手するのに手間のかかることが多い。

さて、博物館に次いで、各地に建設が進められるようになったものとして、公文書館があげられる。東北地方には、まだ建設されていないようだが、北海道・埼玉県・群馬県・東京都・愛知県などに、都道府県立の公文書館が以前から存在し、また、市立の公文書館もいくつか存在する。最近オープンしたところでは、千葉県・栃木県・富山県・鳥取県の公文書館がある。

これらの公文書館には、数多くの歴史史料が保管されているが、その中心は明治時代以降の近代行政文書である場合が多い。それに加えて、都道府県史の編纂の過程で収集された中世・近世文書も保管されたり、マイクロフィルムに収められて収納されていることもしばしばみられる。

博物館では資料は展示ケースに収められ、図書館では活字化された古文書しか閲覧できないのに比べ、公文書館では、原史料を手にとってみることのできるのが魅力である。

公文書館の存在は博物館に比べると、PRが十分でないこともあり、地味なものとなっている。しかし、博物館と同様に、特別展・企画展がしばしば開催されており、地域にとって重要な史料が展示されることも多い。

ただ、博物館以上に、それらの情報が入手しづらい面がみられるのが玉にキズといえよう。とりわけ、界外の住民には、ほとんど情報が伝わらないのである。

もっとも、博物館相互、あるいは公文書館相互では、これらの連絡体制は整備されているようであるが、残念ながら、大学の教員にまではこれらの情報はほとんど入ってこないのが実情である。

山形大学附属博物館は、大学に設置された博物館としては、数少ない存在であることから、大学と、全国各地の博物館・公文書館などを繋ぐ情報センターとしての役割を果たしてくれることを期待したい。

(教養部助教)

## 資料紹介



写真は、江戸時代後期に測量に使われたと思われる磁石盤である。直径約7cmの本体が、約8.5cm角、厚さ2cmの木製の台座にはめ込まれている。本体はとりはずして向きを変えられる。磁針は長さ約5.5cm、磁力が弱まっているのが残念である。

三重に目盛が刻印されており、内側から以下の通り。①子を北に十二支を右廻り、朱塗、<sup>カ</sup>力<sup>ハ</sup>は<sup>ク</sup>黄<sup>ク</sup>の異体字。②北(子)から十二支を左廻り、黒塗、午のかわりに<sup>前</sup>前(前の俗字)。③全周を24に分けそれを3等分、さらに5等分で360に

区画、十二支の各々は24に分けられた一区画の中央(7度5分)に位置。③は①、②の刻印面より一段高い台盤上で、磁針とほぼ同じ高さ。

古来から日本では十二支で方向を表わしていた。北を子、東を卯、南を午、西が酉と時計廻りである。①のように方角どおりの磁石を正針、②のように逆まわりのものを逆針といった。この逆針は日本人の発明で、測量家の金沢清左衛門が明暦年間(1655~57)に航海用として考案したとされている。航海には、正逆両方用いられたが、特に逆針は、別名船磁石と言うほど重用された。正針は子(北)に磁針を合わせて目標物の方位を見るが、逆針の使用にあたっては、必ず磁石の子を船首に向け、磁石の子午線(南北線)と船の中心線とを揃えて置く。すると船の進路と針の指す方向が一致する。例えば、子の方向に進んでいる船が30度右舵をとって丑の方向に向いたとする、磁針は常に北を指すので、船から見れば針は30度左に廻ったことになり、丑を指す。もし正針ならば亥を指すところである。このように逆針は、進路保持用として非常に便利なのである。

船用、測量用として使用されていた磁石は、木製の挽物で、12方位か、それを2分割した24方位の簡単なものであった。地理学者伊能忠敬(1745~1818)は、従来の磁石は盤の形のみ長大で磁針の長さが甚だ短くその巾も広いため方角を正しく計るのは難しいと批判し、西洋の機器をヒントに改良した磁石盤を各種の測量器に取付けて角の測量をしている。中でも最も利用した小方位盤(杖先方位盤)に使った磁石は、細長い磁針を用い、その先1mm弱離れた台座に360度を目盛り(当館蔵と似た構造)さらに軸うけに水晶を用いて摩擦を少なくし、ガラス蓋の内側に十二支を逆まわりで書いたものである。測量地点を結んだ線上に磁石の子午線を合わせると、磁針は方位角を示すわけである。伊能は子を手前側にしたが、一般には子を向見当、午を前見当とし、午を手前側にして合わせた。本館所蔵の磁石盤の逆目盛(②)の午の部分が<sup>前</sup>前と表示されているのは同様にして使われたためであろう。また、台座の一边の柄も測量器の一部に固定するためのものと思われる。

西洋の知識である360度を用いながら従来の十二支と組み合わせ、逆針の発想も取り入れたこの磁石盤は、鎖国から徐々に解放される中で日本人の対応の一面を見せてくれるといえよう。

平成2年度  
公開講座・特別展を終えて

山形県を代表する母なる川「最上川」は、県内の各盆地を悠々と貫いて日本海に入り、その間、数多くの支川を集め、田畑にうるおいを与え、豊かな果樹や緑を育てている。また、県民の飲料水・工業用水としての役割も忘れてはならない。

平成2年度の公開講座では、この「最上川」のように、人間の生活と密接な関わりを持つ「川」を取り上げ、「川」の文化について、自然科学・人文科学の両分野から講じてみた。

受講者の中には、昭和56年度第1回めの公開講座からはほぼ毎年連続して受講されている方もおられ、市民の方々の学習意欲をあらためて認識させられた講座となった。

講師及び講義科目

回 月 日	講義科目	時間	官職氏名
	開 講 式		
第 1 回 9月29日	川船の系譜	120	教育学部教授 横山昭男
	川のフォークロア	〃	人文学部助教授 菊地 仁
第 2 回 10月6日	川と人間	〃	農学部教授 桑原英夫
	最上川沿岸平野の生いたち	〃	教育学部助教授 阿子島 功
第 3 回 10月13日	川虫の生活の仕方	〃	理学部講師 横山宜雄
	経済発展と「川」のあり方を考える	〃	農学部助教授 網島不二雄
第 4 回 10月20日	寄生虫の住めない川	90	医学部助教授 斎藤 奨
	〃	〃	〃
	修 了 式		

特別展「川と文化」

公開講座「川と文化」の延長として本展を開催し、講座の内容を実際の資料を用い、広く一般に紹介したものである。

1. 期間 平成2年11月5日(月)～16日(金)
2. 会場 附属図書館会議室(3F)
3. 主な展示資料

第1展示「最上川の舟運」

指導：教育学部 教授 横山昭男  
協力：山形市 柴田謙吾

万福丸設計板図、船荷札、紅花・青そ販売許可証、柴田玄石筆「集の激流に挑む小輪船」ほか2点、小輪船で使用した道具類11点、小輪船船模型、大石田荷駄賃定、川船鑑札、ビデオ「最上川の舟作り～山形県大石田町」、山形大学附属図書館・博物館所蔵の舟運関係古文書 ほか

第2展示「最上川のつくる地形」

指導：教育学部 助教授 阿子島 功

最上川流域土地利用図、最上川流域立体写真ほか  
第3展示「つつが虫病—その正体」

指導：医学部 助教授 斎藤 奨  
協力：山形県衛生研究所

アカゲツツガムシ・フトゲツツガムシ標本、アサマツツガムシ写真 ほか

第4展示「川をめぐる環境」

指導：農学部 助教授 網島不二雄

庄内地方で実施した「環境問題に関する世論調査」結果発表。

平成元年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	391 (人)
	団 体	49
大 学 生	個 人	449
	団 体	129
児 童 生 徒	個 人	11
	団 体	14
合 計	個 人	851
	団 体	192
	総 数	1,043

山形大学附属図書館 A617 1991. 3. 1発行  
編集兼発行人 山形大学附属博物館  
(〒980) 山形市小島1丁目4-12  
☎0236-31-1421 (内) 2921